奈良教育大学教育研究支援機構

News Letter

2018.3 第 7 号

Educational and Academic Support Organization

教育研究支援機構の再編とその理念

教育研究支援機構長　佐野　誠

平成 29 年度、教育研究支援機構にちょっとした変化がありました。変化と言っても組織編成上の事柄です。すなわち、平成 29 年 9 月 1 日よりセンター所属の「専任教員」全員が大学の講座所属となったのです。具体的に言えば、次世代教員養成センターの 6 名と国際交流留学センターの 1 名の専任教員が新設の教育連携講座に、理数教育研究センターと自然環境教育センター各 1 名の専任教員が理科教育講座に異動いたしました。これは「センターが教員研修機能を、学部・講座が教員養成機能を」という従来型の役割分担を完全に解消し、全教員が一丸となって、現職教員の研修やリカレント教育にも取り組むという大学全体の決意の現れであります。

これまで教育研究支援機構では 5 つのセンターに図書館を加えた 6 つの組織間の横の連携協力に力を注いでまいりました。今後は「教員組織の一元化」を受けて、本学の教職大学院や附属校園、奈良県および各市の教育委員会や教育研究所、そして地域教育諸機関との双方向の連携がこれまで以上に重要さを増すことでしょう。

こういった横の連携を強化し、緊密にすることによって、本学が現在進めているアクティブ・ラーニング教育、ICT 教育、インクルーシブ教育、小学校英語教育、防災教育、ESD 教育プログラム、理数教育プログラム、双方向遠隔授業、そして山間へき地の教育・研修支援等も実りあるものになることを確信いたします。引き続き、皆さまのご理解とご協力・ご支援をよろしくお願いいたします。

奈良教育大学教育研究支援機構

- **自然環境教育センター**
  - 教育研究開発部門
  - 地域開放部門
- **理数教育研究センター**
  - 教育プログラム推進部門
  - 先端科学教育部門
- **特別支援教育研究センター**
  - 発達支援部門
  - 教育実践支援部門
- **国際交流留学センター**
- **次世代教員養成センター**
  - 情報教育部門
  - ＥＳＤ・課題探究教育部門
  - 情報基盤部門
- **図書館**（教育資料館を含む）

【図書館】

1.　図書館の取り組み

図書館では、ラーニング・コモンズ等の利用促進を図るため色々な取り組みを行いました。

（1）ラーニング・コモンズの授業活用

平成 29 年度の年度計画としてラーニング・コモンズの授業等での活用を推進しました。教授会やメーリングリストを通じて教員に授業活用を呼びかけ、動き回ってディスカッションする授業やポスター発表を行う授業、タブレット端末でデジタル教科書を比較する授業等、様々なアクティブラーニング型の授業で活用されるようになりました。教員にインタビューを行い、授業でラーニング・コモンズを活用する利点をまとめた広報用ちらしを作成し教員に周知しました。

また、Windows クラスルーム協議会との協同事業として ICT 教育研修モデルルームを整備し現職教員向けの研修を 5 回開催しました。

学習支援として、7 月 14 日に「学術情報への近道！EBSCO 講習会」、10 月 13 日に「国立国会図書館関西館利用ガイダンス」、10 月 16 日に「英語多読テキストが電子ブックでも読める -Maruzen eBook Library 利用説明会」を開催しました。

ラーニング・コモンズの授業利用

ラーニング・コモンズの広報ちらし

（2）「経験者が語る 卒論の書き方講習会」の開催

学生サポーター企画として 11 月 24 日に「経験者が語る 卒論の書き方講習会」を開催しました。卒論執筆経験者である大学院生が 3・4 年生に向けて卒論を一歩前に進めるヒントを話しました。

「経験者が語る 卒論の書き方講習会」

（3）英語コーナーの設置

英語コーナー

小学校英語の教科化・必修化に備え、英語学習環境を整えるため、5 月に従来の AV 室を改装し、英語コーナーを設置しました。英語えほん・英語多読本等を配置しています。

(4) 地域の教育関係者に貢献するための利用規則改正

地域の教育界により貢献するために、「奈良県内の教育機関に在勤の方」(＝奈良県内の小学校・中学校・高校等の現職教員の方）にも図書館利用者カードを発行し、貸出を可能となるよう4月に利用規則を改正しました。

現職教員向け広報ちらし

広報用ちらしを作成し、教員免許状更新講習や校長会等に周知しました。

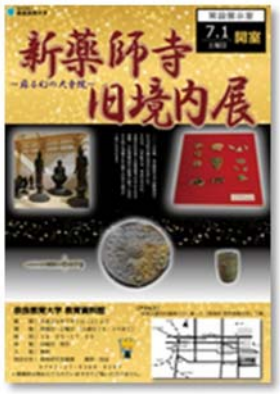
(5) ブック展示企画

学生の自主学習の幅を広げ、図書館の様々な蔵書に興味を持ってもらえるよう、下記のテーマでブック展示を行いました。1月には閲覧室入り口に展示台を設置し「経営協議会委員が奈教生に薦める本」を開催しました。

- 「論文・レポートの書き方」
  (5月30日～6月29日)
- 「もっと先生を知ろう！教員著作を読む」
  (7月7日～8月10日)
- 「レクリエーション特集」
  (7月10日～9月20日、学生サポーター企画)
- 「子どもの本を読む」(10月2日～10月30日)
- 「卒論・レポートを書こう！」
  (11月1日～12月26日、学生サポーター企画)
- 「経営協議会委員が奈教生に薦める本」
  (1月23日～2月23日)

経営協議会委員が奈教生に薦める本

2. 教育資料館での取り組み



教育資料館の利用促進を図るため毎年学内へ企画展示等の募集を行っています。しかし、今年度は第3室を常設展示として「新薬師寺旧境内展」を平成29年7月から開催しています。この展示は、平成20年本学構内において埋蔵文化財調査時に新薬師寺の大型基壇建物遺構が発見されました。この遺構跡は新薬師寺の七仏薬師金堂に相当することで当時大きなニュースとなりました。遺構発見から来年で10年の節目になることから今回常設展示として開催しました。

また、その他に企画展示を下記のとおり行いました。

- 「春のミニコンサート」(平成29年4月12日(水))
- 特別展「海を渡った文化　中国から日本へ」
  (平成29年8月18日（金）～22日（火）)
- フレンドシップ事業「書道を楽しもう」
  (平成29年9月23日（土）～24日（日）)
- 「てとてを合わせて　で・あいのある世界展」
  (平成29年11月19日（日）～26日（日）)
- 書道作品展「中国清代の隷書」
  (平成30年1月26日（水）～31日（日）)

【次世代教員養成センター】

◆ ESD・課題探究教育部門 ◆

1.　ESD・教材開発領域

近畿ＥＳＤコンソーシアム

平成 26 年度から、奈良市・橿原市・滋賀県彦根市・和歌山県橋本市の各教育委員会と連携して、ＥＳＤの推進拠点として奈良ＥＳＤコンソーシアムを形成し、事業展開してきました。これを基盤に平成 29 年度からは、近畿地方におけるＥＳＤの推進拠点として近畿ＥＳＤコンソーシアムを構築しました。

近畿ＥＳＤコンソーシアムでは、①ＥＳＤティーチャー認証制度の運営、②ＥＳＤに関わる研究と教材開発、③学校や地域のＥＳＤ活動支援に取り組んでいます。

ＥＳＤティーチャー認証制度

3 月に次期学習指導要領が公示され、「持続可能な社会創りの担い手」の育成が明記されたこともあり、ＥＳＤを適切に計画し実践できる教員の養成は喫緊の課題です。奈良教育大学では、学生を対象としたＥＳＤティーチャー認証プログラムと現職教員を対象としたＥＳＤティーチャー（現職教員向け）プログラムを開発し、運営しています。現職教員向けプログラムは、ＥＳＤティーチャーからマスター、スペシャリストと、レベルアップしていく仕組みになっています。今年度は学生・大学院生 4 名と現職教員 13 名がＥＳＤティーチャーに認定され、14 名がＥＳＤマスターに認定されました。

ＥＳＤティーチャー・マスター認定証授与式

第 6 次陸前高田市文化遺産調査

ＥＳＤに関わる研究と教材開発の一つとして、陸前高田市文化遺産調査を継続して実施しています。2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災から 7 年がたちました。私たちは、あの災害から何かを学んでいるでしょうか。陸前高田市民の依頼に応える形で、被災地支援の一つとして文化遺産調査を始めましたが、今では、山岸先生を中心とした文化遺産調査を体験し、ＥＳＤ教材開発を行ったり、被災地見学や被災された方々にインタビューさせていただくことで、減災・防災教育を考える機会にしたりと、貴重な学びの場となっています。今年度も学部生・院生・教員の 7 名のチームで陸前高田市を訪問し、平栗福寿庵の聖観音菩薩坐像の調査、向堂観音堂の十一面観音菩薩坐像のレプリカの奉納、災害公営住宅中田交流プラザでのインタビューなど、充実した調査を行い、2 月 17 日には報告会も開催しました。

第 6 次 陸前高田市文化遺産調査報告

学生を主体としたＥＳＤ活動支援

奈良教育大学では、地域や学校で取り組まれているＥＳＤの質的向上を目的に、ＥＳＤ活動支援にも取り組んでいます。特に学校への支援には積極的にＥＳＤを学んでいる学生を派遣しています。今年度は 11 の小学校か

ら野外活動への支援依頼がありました。野外活動は自然に親しんだり、仲間とふれあったりと、ＥＳＤを体験的に学ぶ場でもあります。しかし、昨今は学校規模の縮小により、ベテラン教員から若手教員への野外活動に関わるキャンプファイヤーなどのスキルの伝達が難しくなっています。そのような状況の中、野外活動が大好きな学生を派遣することで、大変喜ばれています。学生にとっては、子どもと接する中で子ども理解を深めたり、先生方の指導を間近で見聞することができたりと、勉強になっています。

思い出に残るキャンプファイヤー

現在は奈良市と橋本市でしか実施できていないＥＳＤティーチャープログラムを他の地方でも展開することで、全国的にＥＳＤティーチャーを輩出していきたいと考えています。

2.　教育臨床・学校カウンセリング領域

教育臨床・学校カウンセリング領域主催により、3 月 2 日（金）に、「感情コントロールはどのように育つのか -教育現場における係わり-」の講演会を開催しました。講師は、東京学芸大学の大河原美以教授でした。専門は子どもの心理療法・家族療法で、長年現場のニーズからの本テーマに関する研究を進め、多くの著書を書いておられる先生です。2 時間にわたる講演は、先生の軽快でスピード感のあるお話の中にたくさんの事例を盛り込まれており、あっという間に過ぎました。参加者は、本学学生、幼・小・中・高・特別支援教育教員、スクールカウンセラーなど 120 名ほどで、元々想定していた定員をはるかに越える申し込みがありました。子どもたちの暴発・暴言はなぜ起こるのか？「死ね！」をどう理解し、対応すればいいのか？等テーマに関して教育現場に強い関心があることが伺えました。

講演の概要は以下のとおりです。学校において、子どもたちは日々いろいろな“イヤな”気持ちを体験します。「自分が一番に仕上げたかったのに、できなかった」「ちゃんと書きたかったのに、消しゴムで紙が破れてしまった」「〇〇ちゃんに押されてころんだ」そこで起こる気持ちは、「悲しい、さびしい、困った」など様々ですが、それらの感情は、脳の皮質下構造（辺縁系と脳幹部）で感じとられる、生体を守るための重要な防御反応だそうです。そのことを教育者が理解しておかないと、教師は往々にしてネガティブ感情をよくないものとして否定し、強くそれを指導してしまいます。「どうしてそんなことをするの? 相手の立場にたって考えてごらん！みんなもいやな気持ちになるのがわからないの？」

しかしそのような対応は、少しも子どもの否定的な感情をコントロールすることにはつながりません。本来、不快でネガティブな感情は、安心できる環境に包まれた場合において、年齢相応に自動制御され育っていきます。そのため、教師や援助者が子どものネガティブ感情を押し込めようとしたり、無理に我慢させようという方向で指導すると、子どもの中には感情コントロールの力が育たないのです。

くり返しお話しされていたのは、子どもたちが、いかに「いやな（不快で否定的な）感情を体験したままでも

大丈夫」でいられる環境を我々がどのように作り出せるのかということでした。そのためにそばにいる大人は、まずは「いやだったね。こわかったんだね。」と子どもの気持ちに寄り添い、それを共感的な言葉で包んであげることが重要です。子どもはネガティブ感情の存在を承認されることで、それをそのまま感じ取り、言語につなげて表現していくこと（@皮質領域）を学んでいくのです（「感情の社会化」）。またネガティブな感情を押さえ込むように対応すると、暴力・暴言で表現するばかりではなく、その反対の「よい子」を保つ自我状態＝過剰適応を助長することにもなりかねないということでした。

感情をコントロールできない子どもたちに我々は「我慢しなさい」と教え込むことが教育だとは思ってはいないでしょうか？筆者の印象に残ったのは、情緒豊かな子どもに育って欲しいと謳っていても、ネガティブ感情は表現しないように指導しているのが今の教育ではないかという大河原先生の問いかけです。

この企画を考えましたのは、昨今学校におけるさまざまな生徒指導・教育相談上の問題（いじめ・不登校・発達障害・虐待など）の背景には子どもだけでなく、大人にとっても感情コントロールの課題があり、その心理的なメカニズムについて我々はもっと正しく知る必要があると考えたからです。

最後のアンケートでは、「大変満足」が全体の 79%であり、参加された大多数の先生がたにとって学びの大きかった 2 時間ではなかったかと思います。「ズバリ芯をついたお話しが聴けた」「手探りでやっていたことが間違いではないことがわかりうれしく思った」「目の前の子どもたちへの対応が浮かんで、納得でした」などの感想がありました。引き続き、現代の学校の教育的課題に役に立ち、現場の先生がたが「明日から頑張ろう」と思えるような講演会を企画･実施していきたいと考えています。

3.　学校・地域教育支援領域

（1）『不登校・ひきこもりのためのハンドブック』刊行

（平成 29 年 11 月刊行）

不登校やひきこもりの状態にある子ども・若者や保護者、また不登校やひきこもりの事柄に関わっておられる方々にとって役立つ情報誌として、『不登校・ひきこもりのためのハンドブック』を 3500 部作成し、県内小中学校をはじめ、教育・福祉関係機関・団体に配布しました。このハンドブックは反響が大きく、産経新聞(12/19 付)に記事が掲載されました。

このハンドブックは、奈良教育大学学長裁量経費を活用して、不登校・ひきこもり経験者を含めた多くの方々の協力を得て作成しました。

その目的は、奈良県内の不登校・ひきこもりの当事者やその家族、そして学校、関係機関が活用できる、居場所や学習支援などの取り組みの情報を提供することにあります。

このハンドブックは、次の特徴を持っています。

第一に、多様性への配慮です。直面している問題の多様性や重なりという現実に対応して、「つながる」「相談」「習う」「遊ぶ」「はたらく」などの側面からそれぞれの支援団体・機関の特徴を伝えようとしています。

第二に、当事者目線と分かりやすさです。できるだけ当事者の目で見て支援のあり方やそれぞれの取り組みの雰囲気はどうなのかという点も盛り込もうとしています。分かりやすさも、そのため重要な要素となっています。

第三に、実用性です。実際に、どこにどんな支援の取り組みがあるのかが見え、つながることができ、試してみることができるような実用性をめざしています。

（2）不登校などの小・中学生のための居場所づくりの展開（平成 29 年 12 月より）

学内施設である寧楽館において、不登校などの小・中学生のための居場所・学習支援を 12 月 19 日から始めました。毎週火曜日 15 時～17 時 30 分の間の展開で、学生ボランティア 9 名（奈良教育大学 8 名、帝塚山大学 1 名）が関わってくれています。利用者は、不登校児童・生徒 4 名（平成 30 年 2 月末現在）とまだ少ないですが、問い合わせ・相談件数が 10 数件あります。

この事業の趣旨は、次の通りです。

- 不登校の児童・生徒、生活保護受給家庭やひとり親家庭など家庭に問題を抱えた子ども達の放課後の居場所支援と学習支援を行います。
- 本事業では、学習支援による子ども達の学力向上と、居場所支援による子どもの社会性や他者とのコミュニケーション力を育むことを目的としています。
- 奈良県、奈良市で活動するスクールカウンセラー２名が運営スタッフとして参加することで、子どもの心身の育ちを支援するとともに、保護者の教育相談にも対応することも目的としています。
- この事業は、子ども一人ひとりの心身の育ちや学びを支えるための取り組みであるとともに、子どもを通して家庭の支援にもつながるものでもあります。
- 本事業では、奈良教育大学の学生がボランティアスタッフとして参加しています。そのため、今後教員として働く学生たちの教育臨床現場での臨床力を高めることも期待できると考えます。

（3）「子ども・若者支援のための事例検討会」の実施

（平成 30 年 1 月 28 日、3 月 4 日、3 月 25 日）

事例検討会の目的は、子ども・若者支援に従事する者を対象として、自立支援の枠組み理解ならびに事例検討を通して、専門性と資質能力の向上をめざすことにあります。

具体的には、下記に関する講義と活動により、支援の取り組みの言語化と支援者の専門性の向上を図ることを目指します。

① 自立支援と専門性について、子ども・若者支援の枠組み（“第三の領域”、「子ども・若者自立モデル」）に基づいて理解を深める。

② 各自の事例の記述・報告を通して、支援の観点、支援者の専門性（ナレッジ(知識)、スキル(技術)、マインド(価値)）、連携のポイントなどについて考え合う。

③ 居場所とセルフエスティームの関係について理解を深め、どのようにセルフエスティームを高めると良いのか考え合う。

④ 発達障害について知り、意欲を高めるための手立てについて知り、スキルアップを図る。

⑤ 上記を踏まえ、事例検討を行うことにより、支援の視点、各団体・機関の持ち味・強みと課題、連携のあり方を考えあう。

研修内容 時刻 ＼ 日程	①1月28日（日）	②3月4日（日）	③3月25日(日)
10:00～11:00	“第三の領域” –ドイツの子ども・若者支援に学ぶ–	居場所とセルフ・エスティーム（自尊感情）①	居場所とセルフ・エスティーム②
11:10～12:00	自立支援の枠組み	発達障害と支援	事例検討③
13:00～15:00	事例検討①	事例検討②	事例検討④

この検討会の受講者は、16 名（奈良県青少年・社会活動推進課、奈良県社会福祉協議会、奈良市社会福祉協議会、奈良市子育て相談課、なら人材育成協会、NPO 法人リージョナルネット、フリースクール游悠塾などの所属者）でした。以下の感想をいただいています。

「親支援・本人支援の必要性について考えることが多いのですが、価値観の違いの話から親支援の重要性を、居場所・自尊感情の話から本人支援で大事にするべきことを理解出来ました。事例検討会はとても参考になりました。」

◆ 情報教育部門 ◆

情報教育部門では、平成 28 年度・平成 29 年度と続けて、「プログラミング」・「3D プリンタ」・「情報モラル」をテーマに公開講座を開催しています。「プログラミング」・「3D プリンタ」については、学生主体による企画・実施という形で児童生徒を対象に開催しています。ここでは、平成 29 年度の「プログラミング」の取り組みを紹介したいと思います。

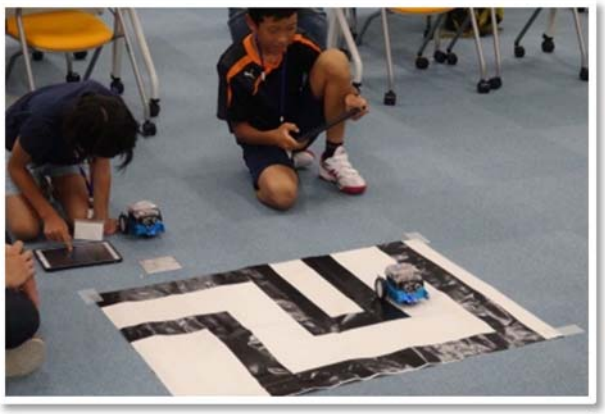
「プログラミング」では、mbot という車型のロボットを動かすプログラムを ipad 上のビジュアルプログラミング言語環境で作成するということを体験してもらいました。平成 29 年度は、4 グループの学生らがそれぞれ 1 回、計 4 回（8/2 2 回、8/5 1 回、11/3 1 回）開催しました。いずれも、簡単な操作説明・トライ、実際にロボットを動かすプログラムをつくってみる、を実践した後、

それぞれの学生グループで考えた以下のテーマを通して、プログラミングを学び体験しました。それぞれの詳細は以下の通りです。

回	日にち	受講者数	実施者	テーマ
1	8月2日	5名(小学生4名 中学生1名)	学生6名 教員	与えられた経路を一番早く通り抜けるプログラムを作成する競争
2		6名(小学生4名 中学生2名)	学生6名 教員	障害物をよけて目的地にたどり着くプログラムを作成
3	8月5日	2名(小学生2名)	学生4名 教員	双六形式で順次与えられる課題をクリアしていく
4	11月3日	7名(小学生6名 中学生1名)	学生1名 教員	障害物をよけて目的地にたどり着くプログラムを作成

参加した子供たちは、ロボットをどのような順序でどのように動かせば良いのかを思考しながらプログラムを作成し、動かし、その結果からプログラムを修正するということを繰り返し、与えられたテーマの達成を目指して取り組んでいました。また早く達成できた子は自ら課題を設けて挑戦する姿も見られ、みなさん非常に熱心に取り組んでくれました。

また企画・実施した学生らの事後の振り返りからは、子供たちの発想の豊かさに関心を持つと同時に授業者としてそれに対応できるようになる必要性や、子供たちの反応を予想した準備の難しさなどが挙げられており、教員を目指す学生にとってもプラスとなる経験になったのではないかと思います。



平成 30 年度についても、より充実した活動になるように準備していきたいと思います。

◆ 情報基盤部門 ◆

情報基盤部門では、基幹ネットワークや基盤システムを運用しており、安全・安心・安定した情報システムサービスの提供を努めています。また情報館では，授業での PC 利用や学生の皆様の自主的な活動での PC 利用を支援するために、PC 教室を整備しています。今回，PC 教室に導入されている授業支援ソフトについて紹介します。

授業支援ソフトは、学校現場において PC 教室等で導入されており、先生と児童生徒の間のファイルの配布回収や、児童生徒の画面を先生用 PC や電子黒板などに表示し上から書き込み、複数の児童生徒の画面を並べて表示などの様々な機能により、PC を使った授業を円滑かつ効果的に進めるための支援を行ってくれるものです。学校現場へのタブレット端末の普及もあり、現在様々なソフトが登場しています。情報館では、その中でも、ジャストスマイル（2F 演習室デスクトップ用）、ジャストスマイルクラス（3F 実習室タブレット用）、Sky Menu Pro（2A 演習室デスクトップ用）、Sky Menu Class（3F 実習室タブレット用）、スクールタクト（ブラウザ用）、キューブきっず（デスクトップ用）、キューブ Next（デスクトップ用）、future 瞬快（3F 実習室タブレット用）などを用意しています。

このようなソフトウェアは実際に触ってみないと、どのような機能なのかわからないことも多いと思います。各ソフトウェアは共通する機能や独自の機能、共通する機能においても操作性に違いがあったりと様々です。授業によっては写真のように模擬授業等で活用することもあるかと思いますが、授業以外の場面においても、ぜひ実際に触って、色々操作してみてください。その上で、授業のどのような場面で、そのように利用すれば、より児童生徒の学びを深めることに活かすことができるのか、について考えてみてもらいたいと思います。

【国際交流留学センター】

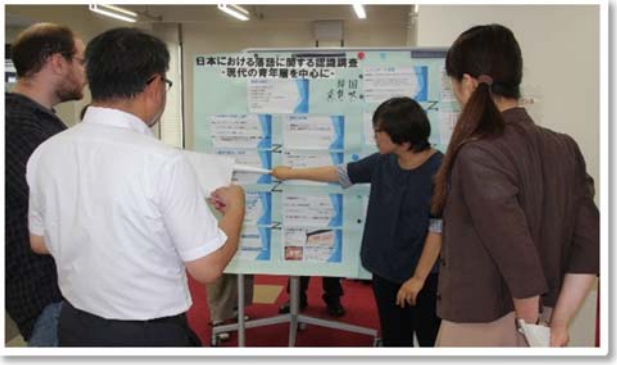
本センターでは、受け入れ留学生への日本語日本文化教育とともに、国際的視野を持った教員の養成に資することを目的とした教員養成大学ならではの国際交流事業を展開しています。設立 4 年目となる 2017 年度の主な活動は、（1）受け入れ留学生教育の運営、（2）学内における異文化交流の活性化、（3）派遣留学生の奨励と支援、（4）附属学校園や地域と連携した国際交流の推進です。活動成果の詳細は、以下の通りです。

（1）受け入れ留学生教育の運営

2017 年度、本学では、アジア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカなど、さまざまな国から約 60 名の留学生を受け入れました。その中には、文部科学省の奨学金を得て、日本の教育事情を研修するために留学している海外の現職教員（教員研修留学生）が 6 名います。本学が協定を結んでいる大学からの交換留学生は、5 ヶ国から 13 名です。本学は、2017 年度海外留学支援制度協定受け入れ短期研修・研究型に採択され、この 13 名に奨学金を支給することができました。他に、日本語・日本文化研修留学生 3 名や、私費での学部生、大学院生、研究生が、本学で学んでいます。

本センターでは、通常の授業の他に、「来日前準備キット」を送付して留学前からの学習を促進したり、歌舞伎や大相撲見学や旅行などの文化体験の場を提供したりしています。限られた授業数の中で、幅広い日本語レベルの多様な留学生を受け入れるという難しい問題に直面しつつも、小規模大学ならではのきめ細やかな指導を行っています。

また、留学生の学習成果発表会は、全学に公開で実施しています。たとえば、7 月には「日研生・交換留学生終了発表会」、12 月には「米国協定校からの留学生による発表会」、3 月には「教員研修留学生最終発表会」を行いました。このうち、米国協定校からの留学生は、「日本とアメリカの大学生活／日本での経験」と題した日本語による口頭発表を行いました。これにより、本学の学生が留学に興味をもつことを期待しています。



（2）学内における異文化交流の活性化

①留学生・日本人学生の共修機会の提供

本学では、留学生と日本の学生とが共に学び合える機会を多く提供しています。たとえば、前期には、留学生用科目「日本語文献講読（言語）」と「教育課程演習」で一部合同授業を行い、多文化共生における異文化間能力の育成に努めました。また、幼年教育関連の科目と留学生科目との合同授業を実施し、日本の学生と留学生とが協働で多文化電子紙芝居を製作しました。成果発表会は、おおいに盛り上がりました。

後期には、留学生科目「日本語教育論」と専門科目「教育課程特講」で一部合同授業を行い、日本及び各国の国際理解教育に関する情報交換を行いました。また、留学生科目「日本語コミュニケーション」の授業の一環とし

て協力した附属小学校の「言語文化」の活動や、留学生科目「日本語教育論」での成果を活用して協力した附属中学校での国際理解教育の活動では、教員養成課程の学生も協力、参観しました。

②学内における国際交流活発化のための取り組み

授業以外でも、国際交流の場を用意し、留学生と日本の学生とが出会える機会を多く提供しています。たとえば、月 1 回の国際交流イベント「なっきょん's café」や、

4 月の「留学生と友だちになろうキャンペーン」を通して、留学生と日本人との交流の機会を提供し、自主的な交流への橋渡しに努めました。さらに、学生支援課の主催で、喜光寺での日本文化体験などを実施しました。

6 月には、協定校のセントラルミシガン大学から学生団と教員が来学し、本学の元派遣留学生と交流を行いました。

また、12 月 9 日には、本センター主催で、「教員養成大学におけるグローバル人材育成を考える」と題したシンポジウムを開催しました。グローバル化がすすむ社会で必要とされる教員の資質や能力について話し合われ、本学の学生にとっても、視野を広く世界に向けるための貴重な機会になりました。

（3）派遣留学の奨励と支援

全国的に日本の学生が内向き志向になっているといわれる中、本学では 2017 年度、4 名の学生を国際交流協定校に派遣しました。本センターでは、多くの学生に留学に関心をもってもらうために、学生支援課と連携して、派遣留学プロモーションウィークを開催しました。具体的には、7 月と 12 月に、図書館ラーニングコモンズを利用して、アメリカとドイツに派遣された学生による帰国報告会を行いました。また、本学附属中学校の吉田寛教諭をお招きし、JICA による現職教員対象の海外研修でのご経験をお話いただき、海外経験がご自身の教職にどのように役立っているのかについて研修会を行いました。

なお、本学では、派遣が決まっている学生を含め海外渡航に関心のある学生らを対象に海外留学安全対策協議会（JCSOS）による渡航前オリエンテーションを実施したり、現地では高額な教科書や教材などの購入資金を援助するための海外派遣留学生支援奨学金を設けたりなど、学生の海外派遣を積極的に支援しています。

（4）附属学校園や地域と連携した国際交流の推進

①　附属学校園との連携

附属小学校では、「言語文化」活動として 11 月に行われた 5 年生の授業で、留学生がさまざまな国や文化の紹介を行いました。

附属中学校では、「日本語教育論」の受講生 6 名が、1 年生を対象とした異文化理解教育の授業の企画、実施を担当し、学生にとっても附中関係者にとっても、異文化間能力を高める機会となりました。

②　地域貢献

日本語・日本文化教育及び地域交流の一環として、山添中学校を 3 回訪問した他、ホームステイも実施しまし

た。本学と山添村との地域連携協定に基づくこの企画は、本学の留学生にとっても、山添中学校の生徒にとっても、そして、この企画にいっしょに参画した日本人学生にとっても、かけがえのない異文化理解の場になりました。

さらに、ボランティアサポートオフイスなどの関係部署と連携し、奈良市放課後子供教室に留学生と日本人学生とを派遣するなど、地域の国際交流活動の推進に努めました。

以上のように、本センターでは、留学生に対して日本語日本文化教育を提供するだけでなく、留学生プログラムを核にして、学内における国際交流の環境を醸成すると共に、その活動内容や成果を必要に応じて学内外へ発信しています。また、海外協定校派遣留学生が得た成果を、帰国後に学内に効果的に還元させることにも取り組んでいます。このようにして、本センターは、本学の国際交流の基本方針の一端を担っています。（その他の活動の詳細は、国際交流留学センターのホームページ（http://cies.nara-edu.ac.jp/）で紹介しています。）

【特別支援教育研究センター】

1.　活動概要

特別支援教育に関わる理論と実践に関する教育研究を総合的に行い、特別支援教育を担う人材の養成に寄与するとともに、地域における児童生徒等の教育的ニーズに応じた特別支援教育推進に貢献します。主な事業内容は、①特別支援教育の内容と方法に関する理論的実践的研究、②教育学部、大学院の特別支援教育に係わる人材養成とスクールサポーター、特別支援ボランティア等の学生の研修等の実施、③発達障害もしくはその疑いのある幼児から高校生を対象とした教育相談・発達相談、④教育委員会等と連携した共同研究、⑤特別支援教育に関する公開講座および研修の実施です。スタッフは、児童精神科医、臨床心理士などの専門家です。平成 28 年度から「学校教育体系全体を視野に入れたインクルーシブ教育システムの構築と合理的配慮・ユニバーサルデザイン教育の開発」に取り組み、今後よりいっそう地域連携に基づく教育相談・発達相談の充実を目指します。

2.　平成 29 年度研修事業

【 公開講座 】

①　「自閉症スペクトラム症をもつ青年が語る−工夫して生きるということ−」（ H29.5.20（土））

講演：「発達障害の理解と支援のために」
根來秀樹（特別支援教育研究センター長/児童精神科医）

対談：「ASD をもつ青年が語る」
インタビュアー：大西貴子（学校教育講座/臨床心理士）

②　「ライフサイクルからみた発達障害」
（ H29.7.25（水））

講演：根來秀樹（同上）

【 ワークショップ 】

「ふしぎな楽器　水カンリンバ」（ H29.12.2（土））

講演：「子どもの発達と感覚の話」
田中裕二（特別支援教育研究センター/作業療法士）

ワークショップ：「水カンリンバ製作」
丸山祐一郎・こやまはるこ（旅の音楽家）

【 教育セミナー 】

奈良県における通級指導教室の今後を語る特別支援教育セミナー（ H29.12.25(月)）

報告：「奈良県の通級指導教室の現状と課題」
中井和代（奈良県立教育研究所 特別支援教育部部長）

講演：「今、目の前にいる子のわかったを目指して
～読み書きに困難さを示す子への支援を考える～」
井上賞子（松江市意東小学校 教諭）

3.　平成 29 年度相談事業

【 保護者・子ども向けプログラム 】

①　寺子屋

学習困難のある児童を対象とした学習支援です。読み書きの評価に基づき、タブレット等を活用しながら、一人一人の子どもの特性に応じた支援を行っています。少人数（登録制）の学習支援を月 2 回、実施しています。

スタッフは教員を目指す学生が中心となっており、プログラムの内容を考えたり子どもの学習を支えたりと、学生が学べる場にもなっています。

②　夏休み!!宿題おたすけプロジェクト
※警報のため 3 日間から 2 日間に変更（ H29.8.9(水)/10(木)）

昨年度に引き続き、発達障害のある子どもたちを対象とした学習支援プログラムを実施しました.学ぶ力はあるのに、衝動性や注意集中困難、読字書字困難、こだわりや感覚過敏などの認知や感覚のアンバランスによって通常の指導ではうまく学習が進まない子どもたち。

教育大学ならではの環境を活かし、教員を目指す学生、教職大学院で学ぶ現職教員が「おたすけ隊」になり、センターの発達障害を専門とする臨床心理士、児童精神科医、作業療法士らスタッフとともに、2 日間、たくさんの夏休みの宿題に取り組みました。学習支援プログラムの一方で、保護者はペアレント・トレーニングを受講。「子どもの学習支援」、「ペアレント・トレーニング」、「学生や現職教員が発達障害のある子どもたちへの支援方法を学ぶ研修」を兼ねた事業となりました。

鉄オタ メンバー（こども）

【 教師向けプログラム】

ティーチャートレーニングアドバンス・クラス

発達障害のある子どもの支援に携わる教員 10 名が参加しました。12 月から月 2 回、応用行動分析学を基礎テキストから学んでいます。今後は論文購読、卒論生の研究発表などに学びつつ、現場の事例報告や事例検討会ができるようになればと考えています。

【 個別相談（発達相談・教育相談）】

平成 29 年度は延 401 件（2 月 23 日時点）の相談がありました。ホームページから WEB 申込ができます（予約制）。

4. 活動予定（新規）

鉄オタ倶楽部

発達障害のある子どもたちが自分との興味や関心をとことん追求しながら集団の中で社会的スキルを学ぶことを目的とした「マニアックラブ」を順次開設する予定です。自分の好きなことを、本当はもっと聞いてほしい、褒められたい、もっと知りたい、上手になりたい、友達と一緒に楽しみたい、そんな願いを叶えるための新企画です。

クラブ創立第一号は「鉄オタ倶楽部」。参加してくれる子ども、スタッフとともに活動日や活動内容を決めていく予定です。詳細は HP をご覧ください。

＊他事業含め、30 年度の事業は、順次 HP にアップします。

鉄オタ スタッフ（おとな）

【理数教育研究センター】

優れた理数系教員の養成を目指す当センターの活動では、本学学生の教育ならびに学校現場・地域との連携のもと、平成 29 年度も多くの事業を企画・立案して実施してきました。以下、それらの一部を紹介します。

1. サマースクール 2017 イン曽爾

10 年を超える奈良県曽爾村との今年度の連携事業は 8 月 26 日（土）～27 日（日）の二日間（1 泊 2 日）で実施しました。内容は以下の通りです。

1 日目

- 開校式
- 「川の水質調査」、「虫取り」
  （小学生対象、大学教員が実施）
- チャレンジ・サイエンス
  （中学生対象の理科・数学ブース、
  学生・大学教員が実施）
- 天体観望会

2 日目

- サイエンス・ルーム
  （小学生対象の理科ブース、学生が実施）
- チャレンジ・サイエンス
  （中学生対象の理科・数学ブース、
  学生・大学教員が実施）
- 閉校式

天体観望会

今年は天候に恵まれ、8 年振りに天体観望会を実施することができ、素晴らしい曽爾の自然環境の中で、共に思いっきり学びました。

2 日間の様子は当センター・ホームページにも掲載しているのでどうぞご覧下さい。

このサマースクールは本学の特色プログラム「スーパー・サイエンス・ティーチャー（SST）」の一環です。学生は理科・算数・数学の教材研究とともに、小学生・中学生、また学校現場の先生方と接していく中で教育現場での実践経験を積んでいきます。

虫取り

サイエンス・ルーム

チャレンジ・サイエンス

2. サイエンス・スクール 2017 in 五條

五條市教育委員会との連携の下、8 月 4 日（金）に開催しました。この活動は、理科や数学（算数）の専門家による様々な実験・演習や体験活動をとおし、児童・生徒の理科や数学（算数）に関する興味・関心を高めることや現職教員の方々の参加によって普段の学校での実験授業の参考にしてもらうことを目的としています。会場の五條小学校の教室やグラウンドでは、子供たちの真剣なまなざしと歓声に包まれました。

開校式の後、次の 4 つの講座を開講しました。

- 「川の水質を汚すものは何か？」
  （担当：藤井智康 教授）
- 「音を見る・クラドニ図形の世界」
  （担当：常田　琢 准教授）
- 「不思議な折り紙、たたみかえ六角形で遊ぼう！！」
  （担当：釣井達也 特任准教授）
- 「飛べ！ペットボトル・ロケット！」
  （担当：松山豊樹 教授）

全体を通じて本学の学生たちもサポーターとして参加し、実験助手を務めたり、子供たちへの支援を行ったり、議論に参加したりと活躍し、特に現職教員の方々からは教育現場の実態に即した貴重な助言を頂きました。

川の水質を汚すものは何か？

音を見る・クラドニ図形の世界

不思議な折り紙、たたみかえ六角形で遊ぼう！！

飛べ！ペットボトル・ロケット！

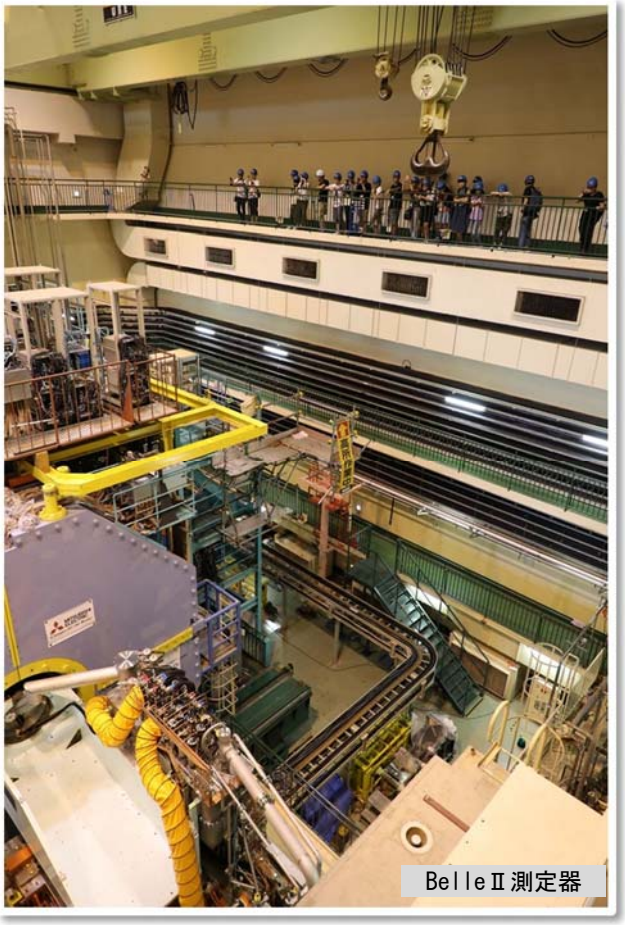
3. 「サイエンス・チームなら」の共同実施

昨年度から 3 年間にわたり、奈良県立教育研究所と共同で JST 採択事業「サイエンス・チームなら」（中高生の科学研究実践活動推進プログラム）を実施しています。この連携事業は高校教員に高校生の研究を指導できる力量をつけてもらい、高校生の科学研究を推進しようというものです。

本学では理数センターが中心となり、高校教員への指導力向上研修会や推進協議会を研究所と共同で実施するとともに、生徒の発表会へも参画し指導や助言をおこないました。今後も、物理・化学・生物・地学の各分野に関わるテーマについて必要に応じて対応し、奈良県の高校生がサイエンスとその研究をより進められるよう、事業を進めていきたいと考えています。

指導力向上研修会

Belle の実験データの中から粒子を探索する研究


BelleⅡ測定器

4. 高校生のための素粒子ｻｲｴﾝｽｷｬﾝﾌﾟ「Belle Plus」

高エネルギー加速器研究機構（KEK）との共催で、高校生を対象とした素粒子サイエンススキャンプ「Belle Plus(ベルプリュス)」を開催しました。このキャンプは、KEK の Belle 実験で実際に行われている最先端の研究活動を高校生に体験してもらうことを目的として、平成 18 年度より実施しています。11 回目となる今回のキャンプには、全国から集まった高校生 24 名が参加しました。

キャンプの中核となる実習では、Belle 実験で使用されている粒子測定器や実験データなどを活用した以下の 4 つの課題を実施しました。

- Belle の実験データの中から粒子を探索する研究
- 自作したワイヤーチェンバーを用いて宇宙線（ミュー粒子）の降り注ぐ角度を測定する研究
- 宇宙線（ミュー粒子）の速度を測定する研究
- Belle 実験で観測可能な現象の理論的研究

【自然環境教育センター】

１．実習林の砂防堰堤工事進捗

2011 年 9 月の紀伊半島大水害において最大規模の深層崩壊が本学奥吉野実習林で発生して以来(図 1)，砂防堰堤工事が進められてきました。当初計画では、そろそろ終わっていてもよいはずなのですが、何度かの台風などによる出水で建設途中の堰堤などが破損したり、土砂が再堆積したことで工事の進捗が大きく遅れています。2018 年 3 月の段階では、1 号・2 号砂防堰堤、床固工群は完成しており、渓流保全工を施工中です（図 2,3)。3 号砂防堰堤等に関しては､2022 年 3 月末までの予定であり､2022 年 4 月に大学施設を本格的に再開できそうな状況ですが、予算の関係で延期になる可能性も十分ありえる状況です。

図 1. 深層崩壊地（2017 年 12 月 19 日）

図 2. 砂防堰堤計画
(http://www.kkr.mlit.go.jp/kiisankei/map/3.html 2018 年 2 月 5 日確認)

とはいえ、1 号・2 号砂防堰堤と床固工が完了し、渓流保全工もそろそろ出来上がっていますので、2014 年 8 月から比べると安全性がずいぶんと高まりました。将来的に日帰り登山実習や建物を利用するためには、建物の被害程度等を調べて文部科学省に復旧のための予算要求することが必要です。そのため、関係者が入山可能かを検討するための第三者専門委員会が 2 回開催されました。委員会では現地の状況を視察するとともに、教育研究の再開に向けて、教育研究棟及び宿泊棟への立入りに係る安全性と今後の対応について議論されました。今後も実習林復旧に向けて取り組みを続けてゆきます。

図 3. 床固工(2017 年 12 月 19 日)

２．授業等代替措置

以前から実習林で行っていた実習や公開講座などの代替措置を 2017 年度も行いました。具体的には、「野外実習―自然の中の理科教育―」と公開講座「夏の森を親子で楽しもう」は上北山村村民総合会館(奈良県吉野郡上北山村)で行い、「生活(キャンプ実習)」は奈良実習園で行いました。かれこれ 3，4 回代替地で実施しているため、毎回キャンプ道具一式を用意して代替地へ移送するための準備などには慣れてきましたが、実際の実習や公開講座ではいろいろ苦労や問題点が残っています。

３．奈良実習園での栽培

実習園の最上手にある田圃における農薬を用いない稲作が 3 年目となりましたが、今年も順調に栽培できました。夏野菜を育てている公開講座の「畑で汗を流しませんか」でも無農薬で栽培を続けています。

公開講座「畑で汗を」では、実際の栽培以外に 5 回の講義を行っています。2017 年度は、作物の栽培方法について、獣被害について、作物の栽培化が人類と環境をどう変えてきたのかについて、日本で有機農業が広がってきた社会的な側面について、などのテーマで講義を行い、受講者らには好評でした。ただしアンケート結果では、早朝や休日に水遣りなどをしたい、という要望がありましたが、それらには対応できていないのが課題です。

４．３センター協働防災プロジェクト

学長裁量経費（教育改革経費・プロジェクト経費）の支援を受け、「内陸型自然災害に特化した体験型の防災教育プログラム開発―自然環境教育センター・保健センター・理数教育研究センター協働防災プロジェクト―」が実施されました。今年で３年目を迎える本プロジェクトの今年度の活動の概要は以下のようなものです。

１）学生による防災対策（卒業研究）

家庭科の学生が中心となり、以下に示す防災教育に関する課題に取り組みました。

- 野外自炊における指導の自信獲得と教科学習導入に向けて―ウッドガスストーブと野外自炊活動指導マニュアルの提案―
- 防災教育課題と学校防災の担い手の育成について―防災教育・活動事例と「学生防災会議」の企画・運営からの考察―
- 避難所生活の減災に向けた特別支援学校の役割―被災障害者に着目して―

これらの卒業研究の要旨は、センター協働防災プロジェクトの HP に掲載致しました。

２）ESD ワークショップ 2017「OOOBR における ESD」（10 月実施）

2017 年 9 月 30 日～10 月 1 日に、上北山村村民総合会館(奈良県吉野郡上北山村)において、ESD ワークショップ 2017 を開催いたしました。ワークショップには、本学教員 3 名、大学院生 2 名、学部生 8 名、留学生 3 名の総勢 16 名の参加者が得られたことで、異文化コミュニケーションまでもが行われ、文部科学省の日本ユネスコ国内委員会の掲げる ESD の理念中、生物多様性学習、環境学習、防災学習に加え、国際理解学習といった内容が展開されました。初日には昼間に昆虫や植物を観察しながら和佐又山登山を実施し、夜間には“Leave No Trace”の講義を実施しました。二日目には、野外救急の速習講座と山歩き現場でのワークショップを大台ヶ原・大峯山・大杉谷ユネスコエコパーク（OOOBR）において展開しました。参加者にとっては、“Leave No Trace”をとおして ESD の本質を学ぶ非常に充実した内容であり、収穫の多い濃密な二日間でありました。本プロジェクトでは、ESD ワークショップ 2017 の実績を反映させ、本学の教員養成に資する防災教育野外体験プログラムを開発、実践報告としてまとめ、自然環境教育センター紀要に掲載されました。

３）教員免許更新講習「選択領域」「共通コース」における講座「奈良の自然災害を知って子供を守る～防災教育入門～」の新規開設（8・10 月実施）

本講座では、本学の教員に加え、国土交通省、奈良県知事公室防災統括室、奈良県教育委員会からの講師を迎え、現職教員に向けた防災教育を行いました。具体的には、防災教育推進プランの紹介や思考シミュレーションの手法を用いた課題を扱いました。防災教育においては、本学の学生への教育という“未来の教育”に対する視点も大切でありますが、それと同等に、地域の教育を支える現職教員の“現在の教育”に対する視点も大切です。今年度も 8 月と 10 月の 2 回実施されましたが、いずれも 50 名の定員が埋まる状況でありました。

◆◇◆

図書館

https://libwww.nara-edu.ac.jp/drupal/

次世代教員養成センター

http://jisedai.nara-edu.ac.jp/

国際交流留学センター

http://cies.nara-edu.ac.jp/

特別支援教育研究センター

http://cp-support2.nara-edu.ac.jp/hp/

理数教育研究センター

http://nesm.nara-edu.ac.jp/

自然環境教育センター

http://www.nara-edu.ac.jp/ECNE/

◆◇◆

奈 良 教 育 大 学

〒630 － 8528　奈良市高畑町

奈良教育大学教育研究支援課

TEL：0742 – 27 - 9303

E-mail: kyoken-shienka@nara-edu.ac.jp